

La Haute-Route を目指して

平成 21 年 5 月 7 日 栗山 昭久

はじめに	p.1～4
前半 Chamonix 滞在編 (2009.3.18～2009.3.21)	p.5～12
中盤 La Haute-Route 編 (2009.3.22～2009.3.27)	p.13～26
後半 南仏旅行編 (2009.3.28～2009.3.30)	p.27～32
まとめ	p.32

はじめに

オートルート (La Haute-Route、高き道) は、アルプスの最高峰モンブランの山麓シャモニ (Chamonix, France) から、アルプスのピラミッドマッターホルンの山麓ツェルマツト (Zermatt, Switzerland) に至る山岳路のことである。春のスキーシーズンに、いくつかの山小屋をつなぎ、山岳スキーで走破するのが山岳スキーヤーの憧れの的になっている。オートルートは1本の道ではなく、幾つものルート取りが可能である。

そして、私もオートルート憧れていた一人である。大学1年次 (2005年) にワンダーフォーゲル部に所属したが、この頃はワンダーフォーゲル部の部員が少なく、山スキーという活動がなかったが、冬山もしくは山スキーがやりたかった私は、山スキーを趣味で行っているOBに連絡を取り山スキーに参加したことから始まる。そして、彼らと様々な体験、経験をしながら、かれらの中のリーダーに今回のオートルートの話聞き、漠然と憧れていたところから今回の旅行は始まる。

そして、時を経て、2009年1月はじめに転機が訪れる。ここまで、オートルートになんとも憧れていたものの、実際に行くとしたら一人で行くことになるし、ヨーロッパアルプスという名前におじけついていて、半ばあきらめていた。しかし、必要な時期に必要なものが来るという世の中の面白い仕組みのひとつであると思っているが、なぜかOBが所属する某大学でオートルートに行く決断のきっかけになるDVDを見るのである。そのDVDの名は「The man who skied down everest」。三浦雄一郎が若い頃にエベレストのサウスコルからスキーで滑走するドキュメンタリーである。彼の世界最高地点 スキー滑降記録は未だ破られていないと聞く。なぜなら滑走の内容が、「滑降を開始して数秒後にはスピードは100kmを超えたであろう。コースは山頂方向からの落石が氷のコースに突き刺さり、極めて危険な状態であった。高度7,500mのThin Airではパラシュートによるスピードコントロールは容易ではなかった。コース半ばで遂に転倒して氷の斜面を滑落したが最後に岩のジャンプ台を飛び越えて停止、大きく片手を上げてサインを送った。」だからであろう。つまり、そのような厳しい条件の中でスキーをするのはあまりにも無謀で雄一郎が生きて帰ってきたことが奇跡に近いからであろう。ちなみにこのDVDは日本ではなぜか日本では販売しておらず、先輩がamazon.comで最後の1枚を仕入れ、さらに某大学でリージョンフリーにしてもらい見ることが出来たのである。

(参考 URL <http://members.shaw.ca/donkato/everest/everest.htm>)



pic1.滑走前の雄一郎

pic2.高度 8000m から直下行

pic3. 耐え切れずに転倒、滑落。

死ななかったのがほとんど奇跡。

三浦雄一郎 DVD の後に紹介してもらったもう一人の男の勇姿も間接的に影響されたと思う。それは日本ではほとんど知られていないと思うが、成層圏からパラシュート高架したキティンジャー（Joseph Kittinger）の映像である。かれは、ほとんど宇宙と言っても過言でない場所からダイビングしたのである。そしてその年はガガーリンが「地球は青かった」と言った年、1961 年より 1 年早い 1960 年であり青い地球を初めて見たのは彼かもしれない。youtube に動画はたくさんあるのでぜひ一度見てもらいたい。



成層圏から jump するキティンジャー

これらの DVD、映像を見ることによって、自分もなにかにチャレンジしてみたいという気持ちと、海外のきっと想像以上であろう山を自らの目で見てまた、入って行きたいという気持ちが強くなり今回、オートルートに行く大きなきっかけとなったのである。

ここから、具体的な話を詰めていくのだが、金銭面はこれも運よく金融危機の影響による円高で大きな問題ではなかった。実際に去年は 1 ユーロ 160 円台であったのがこのときは 110 円台後半に下がっていたのである。また、家族とオートルートに行く旨を伝えると、山好きの父も非常に行きたがり、母も便乗する勢いであった。一緒に行くことは、また親に依存してしまいそうで正直嫌であったが、私の山好きは父の影響が大きいし、逆に親孝行もできるかということで、一緒に行くことにした。わたしも、オートルートに行く前にフランス山岳ガイド協会のある Chamonix の町に数日滞在する予定であったし、山に入るスキーツアーも低いレベルも用意されているので、父たちも十分に楽しめるだろうと考えたからである。さらに、私の姉たちも興味を持ち、社会人であるが、3 連休と有給を 2 日使い、Chamonix の町に 3 日間滞在することになった。つまり、期間はそれぞれ異なるが、メンバーが私、父、母、姉二人と気づいたら家族旅行になっていた。

今回の旅のキーマンはなんといっても Chamonix に在住の横山氏である。彼は、フランス国家検定講師の資格を持つスキーガイドである。彼と知り合ったのも奇跡的である。数年前、両親がスイスのユングラヨッホ（Yungrayohho：三大北壁を有するアイガーで有名な町）を観光中、横山氏の奥様にお会いし、ふとした会話の流れから横山氏の名刺を頂き、今回私が Chamonix の町に行くので、連絡を取ったところ、親切にもたくさんのアドバイスを頂くことになったのである。彼に、山岳スキーの話や Chamonix の町を紹介していただくことで、安心して両親を連れて行く

ことが出来たし、のちに詳述するがアパートの手続き、スキーツアーの手続きなどが上手くいかず、彼がいなかったら今回の旅行が崩壊していたとしても過言でない。

日本でやらなければならないことは想像以上に大変であった。なぜならトラブルが多かったからである。

1. 航空券の購入。旅行代理店を通したのだが、家族それぞれ出発日、帰国日が異なるため手続きが大変であった。しかも、両親の帰りの飛行機が出発前にキャンセルになるなど予期せぬトラブルにも見舞われた。これにより、出発日に成田空港で航空会社とももめたときはさすがに焦った。しかし、幸いなことに、帰りの両親の飛行機（アムステルダム～成田間）がビジネスクラスの席になった。また、航空券がらみのトラブルはもう一つある。ほとんど被害はなかったが、姉たちの帰りの飛行機が前日の成田空港の貨物機の事故の影響で1時間ほど遅れた。もし姉たちの帰りが1日早かったら、成田空港閉鎖というトラブルに見舞われていたと思うと幸いであった。

2. Chamonix でのアパートの予約。今回は家族がばらばらと Chamonix の町にはいたり、出たりするので、ホテルを予約するよりもアパートを1週間借りたほうが安上がりであるし、利便が良いので、Weekly apartment を借りた。これが大変であった。予約も済み、支払いも済んだのが、最後、我々が深夜に到着するので鍵をポストに置いてもらう約束がまったく上手くいかない。彼らの主張は pre-authorization をしてくれと要求してくるのだが、それがまったくわからない。カード会社に電話をして相談をしても解決しない。父親と1週間近く悩んだが、我々の力では解決しせず。しかし、解決しないことには初日は寒空の下で過ごすことになるがそれは避けたい。そこで横山氏に相談し、横山氏が事前に鍵を受け取り、我々が深夜に到着したら鍵を届けてくれることになった。後で話しを聞くと、アパートの管理者とは Chamonix の町の仕事仲間であり、顔も良く知っているので、簡単なことであったと言ってくれたが、わざわざ夜に我々に鍵を届けてくれたのだから非常に感謝である。現地でわかったが、結局 pre-authorization とは日本でいう敷金のようなもので、我々がアパート借りた後きちんと掃除をしなかったらとられるお金のことであった。冷静に考えればあたりまであるが、私の感覚ではホテルに泊まる感覚であったので全く気づかなかったのである。

3. スキーツアーの予約。現代は便利になったものであり、オンラインで簡単に日本で、一見問題なく終えたと思っていた。しかし、単に私がそう思っただけであって、現地にいったら悲惨な状況になっていた。のちに詳細を述べる。

4. 卒業式。これは今でも心残りである。オートルートのツアー解禁が3月下旬であり、また、旅行を考えると卒業式を休む日程となってしまった。OB や先輩と相談したけっか、独断と偏見で卒業式を休むことにしたが、結果的に良くなかった。4年間の節目として卒業式にはきちんと出るスケジュールリングをするべきであったと思う。

Chamonix 滞在編

Chamonix 到着まで

3 月前半までに卒業論文のお礼参りや、オートルートの準備、で非常に忙しかったが、何とか最低限の準備を終えていよいよ出発。後半の南仏旅行については徹夜でいろいろ調べる結果となったが、結局ほとんど何も決まらず気が向いたままに旅行することにした。

成田空港に到着し、搭乗手続きをしていると帰りの飛行機が取れていないといわれる。航空会社の受付員が旅行会社に電話して確認 Chamonix してみてくださいといわれ、確認。旅行会社に電話してみると取れているはずのこと。板ばさみになってしまい、焦ったが、しばらくすると航空会社のほうでチケットの確認ができた。また、私がスキー板を持っていったのだが、荷物量 5000 円程度をとられた。このように色々な手続きで 40 分ほどかかってしまい、いそいそと成田を出発したのである。アパートの予約や、スキーツアーの予約などまだまだ心配なことがたくさんあるのに、いきなりスムーズに行かなかったので、先行きを不安に感じていた。

飛行機の中では、今回の旅行のほかの一つの目的を達成しようと思っていた。それは、大学 1 年次に買ってまったく読めていなかったドストエフスキー作の「罪と罰」の上下巻を完全読破することである。大学 1 年次のときに買ったのはいいものの、主人公の論理的思考や、情景が全く理解できず、上巻の半ばで読むのをやめてしまったが、反対に最近では興味深く読むことが出来た。また、新しいカメラを買ったのでその操作方法を色々試していた。今まではカメラは基本的にすべてオートで撮っていたが、父にカメラの「しぼり」と「シャッタースピード」の使い方を教えてもらい、カメラの面白さを知った。

アムステルダム経由でジュネーブに到着。19 時半頃に到着し、あらかじめ予約したタクシーに乗って Chamonix に向かう。ジュネーブから Chamonix までは車で 1 時間半くらい。夜の高速をひたすら走っていた。制限速度も 120km で実際 140km くらい出していたか。高速料金は 1 回料金所を通っていたが、基本的に高速に入るときは料金所がないので、よく分からない。日本は制限速度が遅いし、高速料金も高いといわれることがあるが、広大な土地にただ舗装すればよいヨーロッパの高速道路と山岳地形にトンネルを掘り、橋を架け、土地代の高い都市部に高架や防音壁を設けながら作らなければならない日本の高速道路を比べると高く遅くて当たり前だと思った。

Chamonix に着くと、横山氏が我々のアパートの前で待っていてくれた。メールでは何度か連絡を取っていたが、実際に会うのは初めてで私は少し緊張していた。しかし、横山氏は特に気にせず、アパートの使い方や、シャモニの町のちょっとした案内などをしてくれた。アパートのつくりで日本と違うところをいくつか紹介しよう。鍵がまったく日本と架け方が異なり、掛け方も easy ではないので慣れないうちは 5 分くらいかかる。ノブを上を上げて回す方向も外側から掛けるのと内側から掛けるのでは異なるので非常に難しい。次に、シャワーの使い方に気をつけなければならない。お湯は基本的にタンクにためてあり、日本のように湯沸かし器でその時その時に沸かしているわけではないので、使いすぎると水になる。実際に、初日お湯を使いすぎて最後の人が水でシャワーを浴びる羽目になった。ダイニングテーブルの下にも引き出しがある。これはこのアパートの机が特殊だったのかもしれないが、まさか机の下に引き出しがあると思わず、

初日は包丁やナイフ、スプーンなどがなくて困った。このようにいくつか、戸惑うことはあるけれども文化の違いとして楽しめる程度であったし、部屋の内装は壁、机、ベッド、椅子など木材をふんだんに使った部屋であったのあったので、広くはなかったが落ち着く部屋であったと思う。

Chamonix 滞在

実質、4日間 Chamonix の町に滞在するわけであるが、基本的に1日1箇所のスキー場なりにし、スキーコースを朝9時頃から15時頃まで行き、夕方は Chamonix の町で過ごすという生活であった。イメージ的には Chamonix の町がたくさんのスキー場のベースの町になっており、Chamonix から天候や、メンバーに合わせて各スキー場に行くという形だと思う。なぜなら、一つのスキー場といってもどれも広くまた個性的であり1日つかっても楽しみきれないスキー場を持っているからである。そして、多くのスキー場はただ山にリフトをつけたという感じであり、圧雪車が入ったコースもあるが、基本的には何処でも滑って良いことになっている。しかし、その分、危険は多いのでそれなりの装備と知識を持っていくことが大前提となっているが。

人が違えばスキー場がちがう。またはスキー場が違うから人が違うのか。スキー場の雰囲気は日本とはちがう。まず、スキー場が広いせいも皆スキーヤーのすべりが豪快である。スピードをガンガン出すし、ターンも大きい。しかし、フォームは決して汚いわけではない。横山氏いわく、日本は、いかにきれいに格好良く滑るかであるのに対し、個々の人たちは長い距離をいかに滑れるか、スピードコントロールを上手くできるかが重要ポイントらしい。私は、その背景は多くのスキーヤーが氷河コースや山スキーをやりたいと思っているからだと思う。やはり、山に入ればいかに体力を使わず効率よくすべることが求められるからである。また、レストランが全く違う。もちろん、パニーニのように安く手軽に食べられる店もあるが、美味しく、また郷土料理が食べられる店が多い。のちに詳細を述べるが、スキー場の役割はただスキーを滑る場所を提供しているわけではない。つまり、アルプスの山々を眺めながら美味しく食事をゆっくりする場所でもあるし、転機のいい日は日光浴をしている人も多い。また、実際我々がそうであったが家族でスキーと食事、文化を楽しむところでもある。やはり食事を大切にすることは非常に重要な要素だと感じた。

以下では各スキー場において私が体験したことを述べることでスキー場の個性、多様性を紹介したいと思う。スキー場は結果的に横山氏にガイドを頼むこととした。4日間という短い期間で効率よく楽しむためである。ガイド料は決して安いわけではないが、単純にガイドという面を考えてもその時の状況に応じて最もよいスキー場を選べる、移動がたやすい、スキー場に行ったらたくさんの情報を教えてもらえる、スキーを教えてもらえるなど、メリットは測りなく大きいし、何より Chamonix の町で総合的に世話になった。おそらく、この町のガイドという職業、(そもそもフランス人の性格?) がそうなのだと思うが、どこまでがビジネスの関係で、何処まで個人的関係に対し細かいことは気にしない、考えない、関係ない、いい意味でてきとう、なのだと思う。そして、良いものに対しては自信を持って良いと思っているし、それを他人に紹介する文化を持っていると思う。



Chamonix の町



Chamonix の夕焼け

・ブレバン・フレジール (Brevent-Flegere) スキー場

モンブラン山系と chamonix の町を挟んで反対側の山にあるスキー場。横に長く、様々な角度からモンブラン山系、具体的には Mt.Mont-Blanc、シャモニ針峰群、ドゥリ、数々の氷河など展望が素晴らしい。特に、標高 2525m 絶壁の上に位置するレストランが素晴らしかった。オープンテラスでモンブランを眺めながら郷土料理が食べられる。隣の席のご婦人はスキーはしないが、ロープウェイを乗り継いでわざわざお昼を食べ来たと言っていた。このようにスキー場といえど景色を眺めるために来る人は少なくない。



フレジールスキー場の一部



モンブランを眺める



氷河の眺めも最高

・クールマイヨール(Courmayeur)スキー場

Chamonix の町からモンブラントンネル (10km のモンブラン山系を貫くトンネル。イタリアとの交通の要となっており多くのトラックが通る。) を通って、イタリアの側のスキー場に入った。理由は、国も違えば文化も違うということでイタリアのスキー場も行きたいという話になったこと、我々のイメージのモンブランはもっと険しいはずだ (Chamonix 側のモンブランは冬は雪が積もり穏やかに見える。) ということイタリア側からモンブランを見たくなったからである。イタリア側からのモンブランは想像以上に素晴らしかった。人を寄せ付けぬほどの岩壁や荒々しい山肌が印象的であった。スキー場もなにやらイタリア人ぼい人が喧嘩しているのかじゃれ合っているのか分からなかったが、言い合いをしていて騒がしい様子も合った。一番強烈な印象だったのがランチを食べた店である。イタリア人のジャコブ氏 (Mr.Jacob?) がパスタとピザを作ってくれるのだがスキー場でこんなものが食べれるのかと感心するほど非常に美味しく、店も昔の酪農家の家を改築して利用している店で雰囲気も素晴らしかった。また、ワインをボトルで頼むと 1.5 リットルのワインが出された。この日はメンバーが一番多い日で 5 人いたが、普段はあまり酒を飲まない一家なので多く、何とか飲みきった。(と思った。) 一息ついたところでコーヒーを頼もうとガイドの人に話したら、「伝統的な面白いコーヒーがあるよ」ということでそれを頼むことにした。そして、出されたのが昔「友情の証」と用いられたリキュール入りのコーヒー? であった。このコーヒーが曲者で、友情の証ということで飲みきるまでに回し飲みし続けなければならない。しかし、アルコール度数もおそらくワインよりも高いと思う。幸い甘いので飲みやすかったが、最後まで飲み干した後は私はべろんべろんになってしまった。しかし、ここはスキー場のど真ん中。この後は、酔いと景色で気持ちよくなりながら駐車場まで滑って行った。

この日は、Chamonix の町以外も楽しみたいということでクールマイヨールの町に行った。この町は Chamonix の町よりも高級なリゾートらしく、お店も高級な品物を扱っている店がおおく、町並みもきれいであった。横山氏いわく、本当の高級リゾートは毛皮のコートを着ているご婦人がいると言っていたが、実際にそのようなご婦人が歩いているのを見て、現実ここ (クールマイヨール) がそうなのだと思った。このまちで、手作りの生パスタと老舗のカフェに行ってから Chamonix の町に帰った。



モンブラントンネルを通りイタリア側へ



イタリア側のモンブラン



Jacob 氏が経営するイタリアンレストラン

・グラモンテ(Grands Montets)スキー場

個人的に Chamonix の町のスキー場で一番面白そうで楽しんでいたのがこのスキー場である。なぜなら、非圧雪ゾーンが多く、斜度も急であるからである。実際に行ってみると、想像以上に広大でほとんどどこでも滑れそうであった。しかし、この日は快晴であったが強風の影響(実際に雪煙がとても上がっていた)で一番上まで行くゴンドラがやっていたので行動範囲は限られた。スキー場の客も山に行くためにトレーニングをしている人も多く、ゲレンデスキーと山スキーの距離の近さを感じた。

おそらく、一番上のロープウェイが動いていて、雪もパウダーであったら、ほとんど山スキーと変わらないようなスキー場であるので機会があればまた行きたいともっとも感じたスキー場である。

もちろん、ランチもとても美味しかった。フランスではあまり見られないバイキング形式のレストランに行ったのだが、厨房ではシェフがちゃんと料理したものを出してくれた。



グラモンテスキー場は斜度がある



グラモンテスキー場



グラモンテスキー場



途中にはこんな岩の散在する

・ヴァレ・ブランシュ (Vallee Blanche)

Chamonix の町からロープウェイを乗継ぎ、いっきに標高 3842m のエギュディミディ (Aiguille du Midi) まで上がる。ちなみに富士山の標高が 3776m である。ここから、50m ほど下ったコルまで降りそこから標高 1600m あたりまで約 20km の距離を数時間かけて下るシャモニでもっとも有名な氷河コースである。

スキー場ではなく、もっとも手軽に山スキーをできるところではないか。といってもスキン (スキー板の裏につける特殊な布であり、雪の斜面を登るときに使用。日本ではシールと呼ばれる) は使わないが。そして、初めて行くにはガイドをつけたほうがよい。急な斜面の下りや、コース上にはクレパスが存在するため、万が一のときに素人では対応できない。

1 日限りのスキーツアーも用意されているので Chamonix の町にスキーをしに行くなら強くお勧めしたい。なぜなら、日本では絶対に味わえない壮大な山々の景色を見ながら標高 2000m のダウンヒルを行え、アルプスという地を身をもって体感できるからである。



エギュディミディを見上げる



エギュデミディからシャモニの町を見下ろす



富士山より高いところからの眺め



滑走開始



どこまでも続く氷河



氷河の割れ目



ここまで来たら終わりもうすぐだ

・ Chamonix でのトラブル

今回の旅行のメインは山岳スキーツアーである。私が、La Haute-Route (6日間)に参加し、両親が Parc de la Vanoise (3日間)のスキーツアーに参加する予定で、日本でオンライン予約していた。それを確認すべく、初日の夕方に山岳協会に向かうと、二つとも予約がとれていなかった。その後の私の英語能力ではどうしようもなく直接的な交渉はフランス語で横山氏にして頂いたので推測であるが以下に理由を記す。(決してどっちが悪いということをお願いではなく、どうすればよかったのかということをお願いしたいということをご理解いただきたい。)

一つ目のトラブルは Parc de la Vanoise (3日間)の申し込みであるが、手続きに関しては不備はなかったと思われる。しかし、当日から1か月ほど前にこのスキーツアー自体が中止になっ

た。その連絡を私に何度も何度もメールを送ったが私が返信をしなかったため、その後連絡しないまま今日に至ったという理由らしい。しかし、私はそのようなメールを受け取っていない。ここからは、推測であるが、最初のオンラインでこのツアーを申し込んだ後に、私が e-mail アドレスを麻衣違えて送ってしまった。送った後にすぐに e-mail アドレスの訂正とお詫びのメールを再送した。その後、正しい e-mail アドレスで連絡をとりあい、予約が確定できた。ここまではよかったのだが、おそらくツアーが中止になり、ガイド組合の事務の方が私にツアー中止のメールを送るときに一番最初に私が送った間違った email アドレスに送っていたのではないかと思う。だから、何度おくっても私にメールが届かず、トラブルに発展してしまった。

二つ目のトラブルは La Haute-Route (6 日間) の手続きであるが、これは Parc de la Vanoise (3 日間) の手続きの 1 週間ほど後に申し込んだ。Parc de la Vanoise (3 日間) の手続きは自宅に Booking Form が郵送されそれに必要事項を記入して送り返し、契約が成立したのだと思うが、La Haute-Route (6 日間) の手続きは私が手続きを申請した確認のメールと Booking Form が添付されていた。(今、メールを読み返してみると the booking form (that you need to return duly completed) という注意書きがしっかり書いてあった。)しかし、私は何を勘違いしたのか(おそらく Booking Form が郵便で来なかったからか?) 現地で Booking Form を記入すればいいと勝手に思い込んでしまい、Booking Form をダウンロードして必要事項を記入して送り返さなかった。もちろんこれでは契約は確定しない。そして私は勝手に予約が取れただろうと思い込んで現地に向かったのである。

この二つに共通する反省点として、①メールのやり取り、特に文化が違う国とのやりとりは細心の注意を払って何度も何度も読み返しながら送らなければならない。email アドレスの打ち間違いなどの、イージーミスは無くすべき。②大事な約束は、出発前に reconfirm をすべきである。今回のように連絡が取れなくて、契約が破棄されていることがあるかもしれない。③金銭の管理にルーズであってはいけない。契約が完了したか、してないかの一つの目安としてお金が引き落とされたか、引き落とされてないかが大きいと思う。悪く言えば、お金を払ってしまえばこちらでも強く主張ができるし、向こうも私がきちんとお金を払う客として扱いが変わってくるはずだ。実際に、La Haute-Route (6 日間) のほうは私の口座からお金が引き落とされていたので、比較的スムーズに交渉が済んだ。

結局、およそ 3 日間ほどガイド協会に通い、横山氏に助けて頂いた結果、私のスキーツアーの La Haute-Route (6 日間) は当初の予定通り、参加できることになり、両親の Parc de la Vanoise (3 日間) はツアー自体がもうないので専属ガイドを雇い、2 日間で別の場所に行くことで落ち着いた。結果論になるが、両親のツアーに関してはおそらく体力的に団体ツアーについて行くのは困難であり、専属ガイドを頼んだほうがよかったし、あれこれと必要なことをしているうちに、我々がフランス山岳会の会員にも慣れたので望ましいプランに落ち着いた。横山氏、シャモニの町の人々に非常に感謝である。

シャモニの町で手続きや準備を終えて、いよいよ念願の La Haute Route に行く。山行記録としてできるだけ詳述し、ときに私の感情を混ぜながら綴って行きたいと思う。

・前夜 (3/21 Sat)

装備チェックと、軽いミーティングのために夕方 6 時半に山岳協会に行く。装備チェックといっても、必要な物を持っているか持っていないかを見るだけで、クランポン（アイゼン、靴の裏につけるトゲトゲ）はあるか、スキンはあるか、ヘッドランプはあるかなどと聞かれたら、その道具を見せるだけで終わった。道具をすべて持っていたので評価は「Perfect!!」。スキーツアーの手続きに不備だらけだったので、この言葉が非常に嬉しかった。ミーティングは明日の朝の集合時間と行動食（軽い休憩時に食べるお菓子。スニッカーズのようなもの）とみんなで食べるランチとして、得体のしれない肉の塊（のちにソーセージだと分かる。そして美味。）を渡されて終わった。

オートルートということで、ビビっていたので少し拍子抜けであったが、無難に終わり安心してアパートに帰った。

下界（山用語で人の生活圏を指す。）で必要な服などは、親切にも横山氏が預かってくれた。そして、帰ってきたら連絡をくれれば良いと言ってくれて、非常に助かった。

・第 1 日目 (3/22 Sun)

前日に言われた通り朝 8 時半に山岳ガイド組合の建物前に集合。実質、このときがメンバーと初顔合わせだったので緊張した。私が集合場所に行くとするでに 3 人ほどいた。とりあえず全員に自己紹介と相手の名前を聞いたが、緊張もありまったく名前を覚えられなかった。最終的にメンバーはガイド 2 人、フランス人 3 人、スイス人 1 人、カナダ人 2 人、アメリカ人 1 人、日本人 1 人の計 10 人となった（最終的には 7 人になる）。装備のビーコン（雪崩で雪に埋まった時のための発信機）のチェックや、ハーネスのチェックなどの最終調整を終えて、バスでグラモンテのスキー場に向かった。天気も良く私の気持ちが逸る中、中々ロープウェイに乗らない。なんでだろうと、ガイドの一人に尋ねると、もう一人のガイドが車のキーを忘れ取りに戻っているらしい。1 時間くらい待つ間、ほかのメンバーと話しができたので良かったが。

ガイドが戻り、ロープウェイでグラモンテ (Gds Montets) の頂上 (3225m) まで上がり、ログノン氷河 (Glacier des Rognons) を下りアルジェンティール氷河 (Glacier des Argentiere) に降りる。今日は、メンバー全員のレベル、技術を確認するためなのでアルジェンティール氷河からアメシステス氷河 (Glacier des Amethystes) 氷河をスキンと使い途中まで登り、アルジェンティール小屋が営業していないために、麓のログナン小屋 (Ref. de Lognan) にまで下り泊まる。

アメシステス氷河の登りはきつく、メンバーの登りの早さに差がつく。中にはキックターン（方向転換するためにスキーの板を 180° 近く回す方法）がままならない人もいた。出発前に、スキーレベルが不十分な人は途中で下山させられるという話を聞いていたので、私は、なんとかつい

ていかねばと必死で登った。しかし、ここは高度 3200m 付近。息もあがり、汗もかなりかいたがなんとか先頭集団にくらいついた。メンバーは私が一番若く、そのほかは 30 代~60 代と思われるが、50 代くらいでも元気に登る女性がいてびっくりしていた。私は、日本で山スキーのトレーニングをし、出発前はハーフマラソンに参加しそれなりに準備をしていたのだが……。一方で、カナダ人の一人がついてこれず、先に小屋に帰って行ったようである。

アメシステス氷河の途中で、帰る時間になったので、スキンを外し、いよいよ滑走である。滑走は、若さと日本の北アルプスを滑っている経験もありできるほうであったと思う。ただ、シャモニ滞在で横山氏に指摘された通り、無駄の多い滑りだとは思うが。

ログナン小屋は、日本のペンションのようにきれいであった。しかし、ログナン小屋にかぎらず、ヨーロッパアルプスの小屋は全体的にきれいである。ペンションに着くと、夕飯まで時間があり、ガイドたちはフランス語で会話をしているが理解できず、何をしたいのかよくわからなかった。とりあえず、写真を撮ったり、雑誌の写真を読んでいた。

ヨーロッパの小屋で一番驚いたことは食事である。ログナン小屋はスキーゲレンデ内にあるのでわかるが、山深い小屋でも食事は、スープ、サラダ、パスタ、そしてデザートとワインがしっかり付いてくるのである。そして、時間をかけて食べる。量も食べきれないほど出してくれるのである。食事はおいしかったのでとても嬉しかったが、食事中はみんなの会話がフランス語で進むので辛かった。カナダ人、アメリカ人もなぜか皆フランス語をしゃべることができ、私だけがちんぷんかんぷんであった。そして、私が色々な異文化に戸惑っている中、たまに英語で話しを振ってくれるのだが、うまく返せず非常に悔しい思いをしていた。

夜は、翌日使うと思われるアイゼンの最終チェックをして 8 時ころ就寝した。



早朝、Chamonix をでる。



グラモンテスキー場からゴンドラを乗る



アルジェンティール氷河を進む。



快晴の中、みんなでランチ



アメシステス氷河の登り



Bye-bye sun!!



途中氷河の脇を滑る



ログナン小屋



ログナン小屋の中

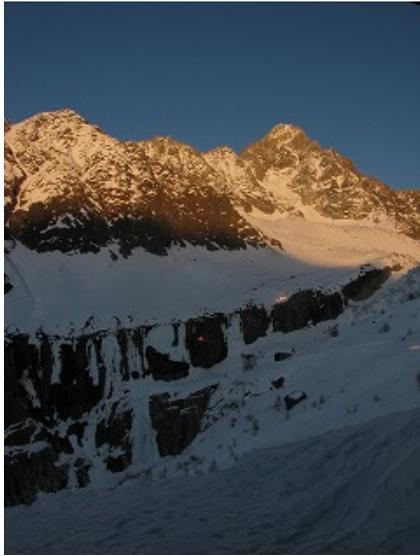
・第2日目 (3/23 Mon)

朝5時に起床。朝5時半に朝食。実は、5時半の朝食に遅れてはまずいと4時45分に目覚ましをセットして、起き、隣に寝ている、Eric (フランス人) を起こしたところ、まだ早いと2度寝されてしまった。この一連の流れを朝食時に話題になり、ガイドから「おれの友達の日本人は非常に効率的に動く、日本人は効率がいいのではないのか？hahaha」と笑われてしまった。朝食時に面白い文化に触れた。ひとり一杯両手サイズほどのカップにココア、紅茶、コーヒーなどの温かい飲み物を入れる。そして、朝食のパンなどをこの飲み物につけて食べるのである。私は、見よう見真似でココア (向こうでショコラ) を頼み試してみるが非常に気に入った。

朝食後、まだ薄暗いうちに出発。まずは、今日のもっとも厳しい登りをしながら Col de Passon を目指す。およそ 1000m アップである。朝早いのでまだ斜面が固く、スキーアイゼンを付けながら登る。2時間ほど歩き続け、Col de Passon の 80m 位下から、スキーでは登れないので、ザイルをつけ、スキー板をザックにつけて登る。ザイルでつながっているのも、ペースをみんなで合わせながら登らなければならない、しかもかなりの急な斜面なので神経を使い、体力的にも、精神的にも疲れた。ここで、昨日ペースについてこれなかった一人のカナダ人が遅れる。あまり、山に慣れていないようで、登りが非常につらそうであった。Col de Passon を超えたら本日二つ目のコル Col de Tour を越えなければならない。水平距離 2km 垂直距離 250m くらいなのだが、疲労が蓄積されてきて最後の登りは非常につらかった記憶がある。特に、疲労か、高度障害かわからないが、登りの最中に少し頭がくらくらしたときは弱気になりそうだった。Col de Tour はフランスとスイスの国境である。ここで、ランチとしてハムとチーズとパンを食べる。ハムとチーズは少しくセのある味であるが、私は基本的になんでも食べられるように慣れるので、おいしく食べられた。Col de Tour に着いたあたりで天気が崩れ始めた。そういえば、Chamonix にいる間はずっと天気が良かったのでそろそろ天気が崩れるころである。そして、ついにカナダ人の一人がついてこれず、ほかのメンバー7人とガイド1人で先に行くことになった。Col de Tour から3つ目のコル Col des Ecandies へとスキーで滑りながら向かう。私のスキーのワックスがあまり効いておらず遅れる。Col des Ecandies の登りはまた板を担いで登るが 30m ほどなので比較的楽であった。Col des Ecandies までこればあとは Champex の町まで 5km ほどを滑るだけなので早い。しかし、雪質は悪く、ターンをジャンプターンで無理やり板を回さなければならず足に負担がかかる。最後はスキー場の一部をすべり、Champex の町に到着。

今晚の宿は Champex の町のホテルで部屋がシングルベッドであり、なんといってもシャワーが使えるのが幸せであった。山に入ると5日間くらいは風呂には入れないのが普通である。夕食までの時間は、Champex の町の散歩と子供向けの本を見ながらフランス語を勉強しようとした。

リビングルームで本を読んでいると、例のカナダ人の知らせが入った。途中で、足を痛めリタイアしたそう。そしてもう一人のカナダ人の友達に「Keep on going the tour.」というメッセージを残した。



Col de Passon を見上げる



Col de Passon の登り



Col de Tour と Col des Ecardies の間



Col des Ecardies の登り



Champex の町へと滑る。



Champex の町のホテル

・第3日目 (3/24 Tue)

朝起きると、窓の外は吹雪だった。20m 先が見えない。とりあえず、朝食を食べにリビングルームに行くと、みんなもなんとなく重い雰囲気であった。ガイドはとりあえず予定通り、タクシーで **Villette** のスキー場に行ってみるということであった。雪の影響でタクシーが遅れる。タクシーの中で、ラジオで天気予報を聞いた。フランス語で何言っているのかわからなかったが、今日明日、明後日はほとんど天気が悪いという絶望的な結果を教えてもらった。**Villette** の町に行く途中、渋滞にはまる。10分くらいまってても全く動かない。タクシーの運転手が様子を見に行くと、雪の影響で、事故があり、パトカー、救急車が何台もいることから、大きな事故らしく、復旧の見通しが立たなそうだと言っていた。山における時間の遅れというのは非常に痛い。今日は天気も悪く、渋滞もいつ解消するのかわからないので、ガイドは考えた結果、予定を大幅に変えて、タクシーで **Arolla** という町にタクシーで行くことにした。このときに、ガイドはメンバー全員に予定を変更した理由と変更後のルートを説明し、メンバー全員に同意を求めた。日本人と比べて基本的にいい加減な性格であるフランス人であるが、抑えるところはきちんと行うので、メンバーからの信頼につながっているのだと感じた。

この日の行動は、山小屋に滞在している間に書いた日記に詳細に記しているもので以下、一部不適切な内容を除いて引用する。

朝、**Champex** のホテルを起きると天気が荒れていた。このまま、ツアーができるか心配であった。ガイドの話ではとりあえず、スキーリフトまで行くとのこと。途中、車のラジオがしばらく天気が悪いことを知らせる。絶望。しかし、父母や姉たちと **Chamonix** で滞在していた時は天気が最高であったので仕方が無いと自分を慰める。道中、車が渋滞にはまる。しばらく様子を見てみると、多くのパトカーと救急車がいることから、大事故と推測でき、復旧まで時間がかかりそうである。天気も悪く、このままいけるかが予測できないため、ルートを変更して、**Arolla** の町に行くことになる。車中の景色を楽しもうとしたが、心地よい車の揺れと、暖かさで居眠りをしてしまった。ここ3日間、慣れない環境と聞こえる会話がほとんどフランス語という状況にさすがに疲れていたのではあろうか。今思うと、自分がフランス人の集団に一人であることが異常な状況だと感じる。憧れて、思いつき、長田さん（親しい先輩）の後押しで、また横山さんの絶大なる手助けによって自分がここにいることは、ある意味で「国際化」が発展しているからなのか。今は、自分一人がここにいるが、ここまで自分を後押しして、支えてくれた、日本の皆に感謝したい。

…あまりに個人的な感情であるため途中省略。…

さて、回想はここまでにしよう。**Arolla** に着いてすぐにスキーリフトに乗る。このスキーリフトがくせ者で、ロープを股に挟んで引っ張ってもらうタイプである。それだけならまだしも、距離が長い。地図を見ると、1.5km も引っ張られていた。そりゃ辛いわ。

リフトを降りてシールで **Pas de Chaores** まで登る。視界は最悪。ひたすらガイドについて行く。**Pas de Cheores** のくぐりは怖かった。ハシゴを下るのだが、スキーブーツであり不安定であるし、途中ハシゴからハシゴにトラバースをしなければならないのでかなりビビった。しかも息が荒くなればなるほどサングラスがくもるという悪循環。しかし、そんな自分

に気づいてくれたのか、ガイドが一言。「Smiling.」これが良かった。なんでこんなに気持ち
が楽になるのであろう。そういえば西水さん（世界銀行元副総裁）も同じようなことを言っ
ていた。

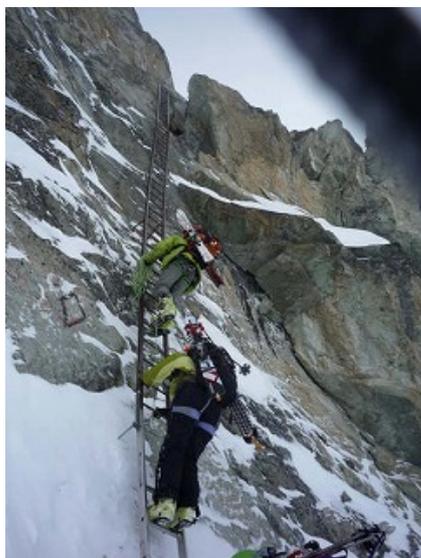
Pas de Cheores から今夜泊まるディス小屋（Cab des Dix）まではスキンで一気に登る。
後ろを振り返ると我々の後を2パーティが付いて来る。我々はラッセル（新雪を歩いて、足跡
をつける。一步一步踏ん張らなければならないので先頭の人是非常に体力を要する。）しな
がら進んでいるが、彼らは我々のトレースを付いてくるだけなので早い。先頭のガイドは何
も思わないのだろうか。

Dix 小屋に着くと、すぐにランチタイムだ。横山さんも言っていたが、彼ら（フランス人）
は食事を非常に楽しむので雰囲気は温かい。しかし、日常から食事に時間をかけているのだ
から、もちろん能率が落ちるらしいのだが、どっちが良いというのは難しい問題だ。それこ
ろ GHP（Gross Happiness Product）のようなもので計るしかないと思うのだが。

ランチはスイスまたはフランス郷土料理であるジャガイモ、チーズ、ベーコンを炒めた料
理を食べた。メンバーと話したら、スイス料理、フランス料理であるか意見が対立したが、
アルプス料理であるということで意見が落ち着いた。実際にそうなのであろう。交通の便が
悪い時代に保存食をいかに美味しく食べるための知恵なのだと思う。この日はやはり疲れて
いたのか、食事後、本（なぜかこの小屋に『伊豆の踊子』が置いてあった。おそらく日本
人が置いていったのであろう。なんとなく嬉しかった。）を読んでいたら寝てしまった。

夕食は、スープ、サラダ、パスタ、デザート。なんで山奥の小屋なのにこんなに食事がし
っかりしているのであろう。

深夜、皆が寝ている中、騒がしかった。とりあえず、異常事態であるというのがわかるが、
フランス語で会話しているので分からない。隣で寝ているもっとも年齢の高そうな人が何か
問題でもあるようだった。彼が、何か電話をしているようだったので、この時は私は彼の家
族にご不幸が起きたのかと勝手に思っていた。しかし、彼は翌朝ヘリコプターで帰った。肺
が悪かったらしい。二人目のメンバーが抜けた。そして、去り際に彼が残した笑顔が忘れら
れない。





デイス小屋 (Cab des Dix)

・第4日目(3/25 Wed)

朝6時半に起床。天気は昨日よりも良いと思った。しかし、朝食後のガイドの話では天気が荒れるとのこと。そのため、予定であれば col du Brenay を通って、ヴィンガネット小屋 (Cab des Vingnettes) に行く予定であったが、安全をとって、Arolla のスキー場に一回戻って、回り道しながらヴィンガネット小屋に行く。少し、残念であるが、いずれにせよ視界が悪いのでどっちでもいいやと自分を納得させる。出発すると、遠くのほうでゴロゴロと雲が鳴っていた。嫌な予感がする。なぜなら、過去、日本の北アルプスで遠くでゴロゴロ雲が鳴った後は、雷が山にやってきて怖い思いを2回ほど経験しているからである。(今回はそのようなことはなかったが。) 昨日とおなじ Pas de Cheores を通る。ここでカナダ人の Holly がアメリカ人にアドレスを教えていた。なぜ、このタイミングなのだろうと疑問に思っていたら、1時間後、彼女の姿はなかった。2日目でドロップアウトした同じカナダ人の友人のなどのなど様々な思いが交錯して考えた結果、Arolla のスキー場から帰ったらしい。また、メンバーが一人減った。

Arolla のスキー場から Gl. de Piece を通って、ヴィガネット小屋へと向かう。雪崩の危険があるところは間隔をあげながら通過したりと、要所要所で気を使いながらひたすら登る。ヴィガネット小屋には13時頃に着く。吹雪いているせいか、すでに15時くらいだと思っていた。ヴィガネット小屋は最近改築したのか非常にきれいで新しいような小屋であった。

ヴィガネット小屋で昼食を食べるが、またヨーロッパの郷土料理をご馳走してもらおう。昨日食べたもの少し違う。作る人によってテイストが異なるのであろうか。夕飯が18時半なので時間があり、ダイニングルームでオートルートの本を読んだり、日記を書いたりして時間を潰していた。そういえば、ガイドの人が i-phone でネパールの動画を見せてくれた。自然にもっとも近い職業の人が最先端の携帯電話を駆使してお客を楽しませていると思うとおかしかった。

夕飯は毎度のことながらサラダ、スープ、パスタ、デザートを食べた。しかし、今日のパスタ

はいつもより多い。大きな皿に盛られたパスタをみんなで取り皿に分けながら食べるのだが、かなり残っていた。みんなお腹いっぱい気味であったので、私が進み出で全部食べるという。みんながまだ食べるのかと少し驚いていたが気にせず、完食。と思いきや、パスタとソースのバランスが悪く、ソースが残ってしまった。ガイドにパスタだけ盛ってこようかと冗談ですすめられたが、私は何を思ったのか、ちょっとここで何かやってやろうと思い、パスタのおかわりを要求した。(厨房の奥ではパスタが余ってそうでもあったので。) ガイドもふざけて皿一杯にパスタを盛ってきた。この野郎と思いつつ意地でパスタを食べ続けた。黙々と食べ終わる頃にはみんな驚きの表情で私を見ていた。メンバーの一人が「We were impressed with your eating food!」と言ってくれた。

最初は、なんとなくメンバーの中で日本人ひとり浮いていた気がしたが、ここまでともに苦労して登ってきたことや、このパスタの一連のやりとりなどが積み重なって、この日あたりから、なんとなくメンバーに溶け込めてきた感じがあり、うれしかった。



救助ヘリが小屋の脇に乗り付ける



Pas de Cheores へ戻る



Dix 小屋は大きな岩の上に建っている

・第5日目(3/26 Thu)

この日は、予定では Col de l' Eoeque を通り Cab de Bartol に行く予定だった。しかし、朝起きると、吹雪いていた。天候が悪い中とりあえず出発した。風と雪で視界が非常に悪く、新雪に入ると、前が何処までが地面で、何処までが空気で、斜面がどのくらいの斜度があるのかがわかりづらいホワイトアウトという危険な状況ではあった。ガイドは、ストックの先に赤い紐をつけて前に投げることで随時斜面を確認していた。途中、斜度が急になったところで、立ち止まる。ガイドの経験から雪崩の危険性を感じたのであろう。一人のガイドがザイルにつながれながら様子を見に行く。結果、この斜面を通過するのはリスクが高すぎるということで、いったん小屋にもどる。小屋にもどる途中、雲がとれて太陽が出た。

小屋では我々と同じルートを検討していたもうひとつのパーティーが準備をしていた。しかし、我々が雪崩が危険なため、そこを通過するのが困難であることなどを相談した結果、予定を短くし、二つのパーティーではぼ共に行動し、食糧を共有しながら今晚は無人小屋に泊まることになる。つまり、パスタやソース、パンを自分たちで持って行き、雪崩の箇所は遠回りをして通過することになった。

Col de l' Eoeque に着くとそこはイタリアの国境である。まあなにもないけど。このあたりから天気が崩れ始めていて、Ref des Bouquetins につく頃にはまた吹雪き始めていた。

Col de l' Eoeque は無人小屋である。しかし、中には別途が放射状に敷き詰められていて、真ん中にストーブ置いてあり、ストーブの上に調理器具を置くことで料理もでき量になっている。鍋などは小屋においてある。水は、冬山では当たり前だが、外の雪をかき集めてきて鍋で解かす。

ここで、いつもテント生活で利用しているビーチサンダルが役立った。最初私が使っていたら、ガイドに「お前は何処のビーチに行くんだ。外は雪だぞ。」と馬鹿にされたが、しばらくしたら、「そのサンダル貸してくれ。」と便利さが分かってくれたらしい。下山後、みなスキーブーツで歩いている中、サンダルで歩いていたら「そのサンダルの正式名称を教えてくれ」と言ってきた。今度買うつもりであるのか。

今晚が、最後の夜であるが、今日はパスタを作りながら、たくさんいろんな人と冗談を言い合えたのがうれしかった。笑いあうことで、やっと仲間に入れた気がしたし、今までの苦労も吹き飛ぶ。こっちのガイドは人を笑わすことがつくづく上手いと感じた。



視界が悪い中、雪崩を警戒する



雪崩が危険なので引き返す



晴れのヴィガネット小屋と私



ヴィガネット小屋から再出発



ヴィガネット小屋は崖の上に建つ



雪崩危険箇所を高巻きで迂回する



スイス-イタリア国境



Ref des Bouquetins



小屋の中は意外と快適



パスタを作る

・第6日目(3/27 Fri)

いよいよオートルート最終日である。しかし、天気は相変わらずに悪く、なんとなく気が重い。今日はふたつのコルを越えるがまずは Col du M.Brule を登る。斜度が急であり、雪崩の恐れがあるのでひとりひとりの間隔を十分にあげて登る。なかなかの斜度であり、かつ雪ももろいので気を使った。

この後、完全なるホワイトアウトの中をガイドのトレースを頼りに滑る。よくこのような状況で進めるなど感心していた。そして、いよいよ最後のコルである、Col de Valpelline に登る。登っても相変わらずのガスで視界が悪く、今日も晴れなかったかとあきらめていた。しかし、空を見上げるとなんとなく雲が薄い感じがしていて、上手いこと晴れないかなと考えていたら、歓声が聞こえる。なんと、雲の切れ目からマッターホルンが見えるではないか。急いでみんなで写真を撮る。しかし、マッターホルンはすぐに雲に隠れてしまった。

視界は少々悪いが、最後のツェルマットへと滑り出した。すると、雲がみるみるうちにとれていくではないか。正面の山々が次々と姿を現していく。そして、私たちの目の前の視界もどんどん良くなる。最後には、マッターホルンも姿を現した。結果、ついさっきまでの降雪もあり、絶景の中をパウダースキーですべるという最高のコンディションを滑ることができた。誰も、滑られていないパウダースノーをすべる間隔はまるで飛んでいるようであった。そして、今までの苦勞や、ここまで来れたこと、そして今の劇的な気候の変化など色々複雑な感情が交錯してすこし涙が出た。

マッターホルンを見ながら滑り、途中ツェルマットのスキー場を通りながら町に着いた。町に着いたら、充実感で溢れていた。メンバーも表情を見ればあきらかに同じように満足感を感じているようであった。

ツェルマットの町で、帰りの電車までに最後でメンバーで昼食を食べて、ツアーの無事終えた喜びと満足感にひたる。このように、山の魅力の一つは全くバックグラウンドの違う人たちと、同じ目的を共有し、それに向かい全力で立ち向かうことで、日常では味わえない一体感だと思う。そして、心底メンバーに対する感謝の気持ちや、出会えたことの喜びを大きく感じる。今回も、ごく自然にスイス人と別れの際にキスを交わして別れ(頬)、以前日本で山の研修に参加した際にもザイルパートナーと抱き合って別れた。

ツェルマットの町はシャモニとまた雰囲気異なり、こじんまりしていた。そしてなにより、電車でしかこの町に入れないのがいかにもヨーロッパらしい発想である。途中からタクシーに乗り換えてシャモニの町に帰る。道中、スイスの最大の軍隊施設がある。道の横で当たり前のように戦車が置いてある。そういえば、山でも山からかなり近い高度を戦闘機が通過していた。軍隊と民間の距離が近く感じられた。

シャモニの町に着いて、約束どおり横山さんに電話を掛けて、荷物を届けてもらった。そして、youthhostel で荷物を置いた後、横山さんの家で夕食に誘ってくれた。横山さんの奥さんも非常に優しく、温かみのある方で、久しぶりに緊張も解け、とてもおいしい日本の料理をご馳走していただいたのでまるで我が家に帰ったかのような気分であった。横山さんも非常に海外で多くの経験をなされた方で、今回の私のオートルートツアー参加や、翌日から行くフランス旅行に興味

を持っていただいた。そして、とても印象に残った言葉がある。「20代でやる無駄なことは無駄ではない。今後必ず役に立つよ。」今年から行く留学のことや、今後の進路などで色々悩んでいる私にとって非常に励みなる言葉であった。



Col du M.Brule の登り



ガスの中を進む



Col de Valpelline でマッターホルンが姿を見せる



皆、大喜び



徐々にガスが取れていく



マッターホルンと私



マッターホルンを見ながらパウダースノーを滑る



まだツェルマットは遠い



ツェルマットで満足感に浸る



ツェルマットは電車でしか来られない



ガイドの Etine



もう一人のガイド (名前は忘れてしまった)

南仏旅行編

せっかくフランスに来たのだからオートルート終わった後にそのまま帰るのはもったいないと思い、旅行に行くことにした。期間は3日間。なぜ3日間というと飛行機の値段、ユーレイルフランスパスが3日間である、3日間あれば目的の町にいけるだろうというどんぶり勘定からである。フランスに来る前に、計画を立てようかと思ったが、電車のダイヤがよく分からない、オートルートや、シャモニ滞在の手続きが想像以上に大変であったので、多少不安があるがいきあたりばったりで行くことにした。

とりあえず、目的地は南仏のアルルという町にした。理由は、なかなか行く機会のなさそうな南仏にいきたかったのと、ガイドブックを見る限り、アルルという町は歴史的建造物が多く、町並みも面白そうだったからである。

・南仏第1日目(3/28 Sat)

まず、なにより電車の時間を調べなければならない。どのくらいでアルルという町に着くか全く調べてなかったのが、ひょっとしたら今日中につけないかもと少し心配であった。朝9時に駅に行って、係員の女性にアルルに行きたいと相談する。パソコン調べてくれて今日中に着くことが分かった。しかし、10時間かかるので1日つぶれることが判明。しかし、リヨンの町に2時間滞在できるので行くことにした。帰りの電車も調べてもらい、意外とすんなり用事は終わった。

リヨン

途中、乗り換えのためリヨンに2時間滞在した。リヨンの主要駅（Part-Dieu）から中心部に地下鉄を使うのだが、いきなりスリの洗礼を浴びた。おそらく、私がガイドブックを手にいかにも旅行者の姿をしていたからであろう。幸い、ポケットにはなにも入れていなかったのが被害はなかった。今まで、シャモニという田舎町にいたので、リヨンというフランス第2の都市にきてビビる。スリで少し弱気になっていたせいもありリヨンではフルヴィエールの丘を見てそそくさと主要駅にもどった。リヨンで印象的だったのは老若を問わず女性の服や姿が皆オシャレであったことである。リヨンは織物で有名な都市だからであろうか。それともフランスだからであろうか。



リヨンからアルルまでは3時間くらいであった。この日は、アルルのユースホテルに泊まろうと、朝から何度も電話を掛けているのだが、繋がらない。さすがに夕方になると焦ってきたので、

ガイドブックに載っている安くて駅から近いホテルに泊まることにする。電話で英語で予約を取るのに緊張したが、上手くいって安心した。このホテルに限らず、海外で契約をするときにもっとも重要なのが、クレジットカードであることを学んだ。なぜなら、大体の予約は名前、日付、クレジットカードの番号と有効期限なのである。つまり、クレジットカードが無ければ信用してもらえず、予約を取るのが困難であると思う。

リヨン駅に着くと、すでに日は暮れていて、雨が降っていた。当然傘をもっていなかったのも、ホテルまで走った。今回のフランス旅行は全体的につくづくいきあたりばったりだなと思う。ホテルに着くときちゃんと予約が取れていたのでもうれしかった。ホテルのオーナーと少し会話をしていると「そういえば明日からサマータイムだよ。」と教えてくれた。そういう情報が他では一切入らなかったのも、よかったが、そういう情報は早く言えよと思った。部屋は、50ユーロでセミダブルのベッドがひとつと、シングルベッドがひとつ。広さ十分、淋しさ倍増。そういえば、夕飯を食べてないなと思い、山であまったスニッカーズを食べて済ます。山の食事のほうが豪華でしっかりしていたなと凹む。ちょうどフランス VS 東欧のどっかの国のサッカーの試合をやっていたので観戦していたら、寝ていた。

・南仏第2日目(3/29 Sun)

今日の朝は、6ユーロ払ってしっかり朝食を食べることにした。そういえば、ココアにパンをつけて食べる習慣がしっかり身についてしまった。朝食の後はチェックアウトまで散歩しながら今日泊まる宿を探すことにした。値段的にはユースホステルが安いのだが、駅からの距離など色々考えた結果、50ユーロのオシャレなホテルに泊まることにした。こじんまりとしたホテルだが、中庭や廊下が雰囲気があったことが最大の決め手。

日中は、アルルの観光名所をまわった。アルルの町は古代のローマの遺跡がおおく、手軽にコロシウムや野外劇場が見られるのが魅力。さらに、町が古いので、城壁に囲まれたエリアは道が様々な表情があって歩いているだけでおもしろかった。

夕方、時間があまったので、明日の電車の確認とTGVの予約をしようと駅の受付にいったらTGVの席が満席で会った。TGVはフランスの新幹線であるが、日本の新幹線と違い立ち乗りができならしい。早めにシャモニに帰りたいだったので朝一で出るつもりであったが予定が崩れた。次のTGV(なんとしてもTGVには乗りたかった。)を探してもらおうと、なんとかシャモニに19時くらいまでに着く。しかも、朝が2時間ほど時間ができたのでアヴィニオンという町も観光ができそうであり結果オーライだった。

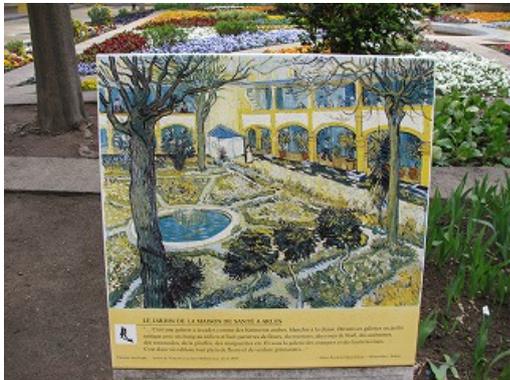
夜は、夕食をする気が起きずまたホテルでパニーニを食べて寝た。



アルルの町並みはおもしろい



かわいいお店が多く並ぶ



アルルはゴッホで有名だ



歴史が感じられる市庁舎



ローマ文化漂う闘技場



アルルの町並み



ホテルの中庭



ホテルの中庭2

・南仏第3日目(3/30 Mon)

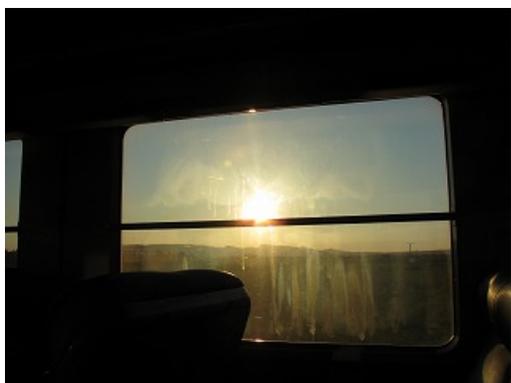
朝7時半にアルルの駅に行く。当初の予定では調査不足でアヴィニオン TGV 駅にまずいきそこからアビニオン・サントル駅までバスで行くという回りくどい方法で行くつもりであったが、駅に着くとアヴィニオン・サントル行きの電車が30分遅れていてちょうど到着するころであった。運よく、アヴィニオン・サントルまでダイレクトで行けた。

アヴィニオンは中世の南仏の中心地であつたらしく、周囲が立派な城壁に囲まれ、奥にはヨーロッパ最大のゴシック宮殿である法王庁宮殿がある。2時間しかないのに、法王庁宮殿だけ行くことにする。法王庁宮殿は内装は戦乱などで無くなってしまっているが、とにかくでかい。一番圧巻だったのが礼拝堂の大きさであった。高さ20m、長さ52mの大きさは今まで見た中で一番大きいと思う。

その後、バスでアヴィニオン TGV 駅へと移動。電車が結構好きな私は少し興奮気味であった。駅はとてもデザインがよく、東京国際フォーラムのようなデザインであり、日本の新幹線の駅とは雰囲気違った。また、トイレが有料であることに戸惑った。何も知らずトイレにいったら掃除のおばさんにお金を要求されはじめなんのことがわからず、やり過ぎそうと思ったら、看板をもってきてまで請求された。50セントくらいなのでたいした値段ではないのだが、最低限のマナーなのであろう。私が乗った TGV は2等であったが、オール2階建てで室内空間が日本の新幹線よりも広く感じられた。

TGV はリヨンの駅に15分ほど遅れて着く。実は乗り換えが時間が20分しかなく、焦ったが、

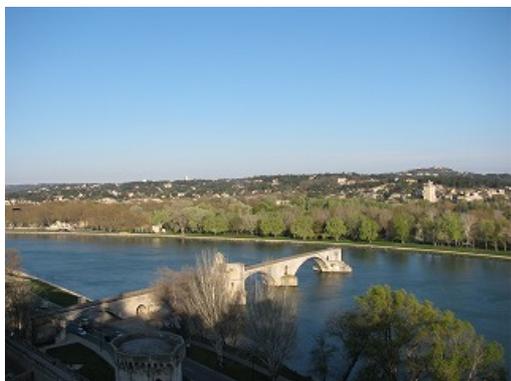
無事に乗り継ぐ。しかし、乗り継いだ電車もなぜかのろのろと走り、時間どおりに着くのかと
思っていたらやはり遅れた。乗り換えの表示があったが、幸い自分が乗っている電車がそのまま、
次の目的地に行く電車であったので助かった。St-Gervais Les-Bains に到着し、あとはシャモニ
までの登山電車に乗るだけだと思っていたら、ホームに横山さんの奥さんが私を待っていてくれ
た。夕飯を横山夫妻と食べる予定であり、わざわざ迎えに来てくれたのである。妙に嬉しかった。
最終日の夜は、私が泊まるホテルのレストランで、韓国人が経営している韓国料理をごちそうに
なってしまった。旅行の話、フランスの話、シャモニの話など話題は尽きなかった。特に、面白
かったのは、なんで横山夫妻がこんなにも親切にしてくれるなかということである。理由は、お
二人とも 20 代の頃、海外にたくさん行き、現地で現地の人を含むたくさんの人に世話になっ
たから、今回が私たちがまだまだなににおいても不十分な学生に世話する番という話（“もちまわ
り”と表現されていた）だ。私も、将来、お二人のように人に接し、“もちまわり”を果たした
いと思う。



早朝、アルルを発つ



アヴィニョンの入り口



アヴィニョン橋



法王庁宮殿正面



教会の上には金のマリア像が建つ



法王庁宮殿・大礼拝堂



法王庁宮殿の一部はワインセラーになっている



アヴィニョン TGV の駅



念願の TGV



とてもお世話になりました。

・南仏旅行第4日目(3/31 Tue)

いよいよ帰国である。シャモニからバスでスイスのジュネーブ空港に行くのだが、ホテルからバス停まで朝早いのに横山さんに送ってもらってしまった。至れり尽くせりして頂いて、なんとお礼を言えばわからない。

バスは、旅行者用なのだと思っていたが、通学にも使われていて、狭い道を学生を拾ったり、降りしながら進む。効率の良いバスの運営だと思った。

ジュネーブ空港に着いたら、もうあまり心配することは無かった。ここ2週間は常にいろいろと考えて行動していたのでさすがに疲れた。しかし、なんと充実した2週間であっただろうか。いろいろな人に触れ、たくさんの経験をした。そしていろいろなことを考えた。

飛行機内で最後の目標であるドストエフスキー「罪と罰」を必死に読みながら（フライト10時間のうち8時間読み、最後成田の滑走路からターミナルに行く途中でちょうど読み終わった）日本に帰った。

まとめ

- いろんないき方があるという意味で自分の小ささがよくわかった。
- 人と人のコミュニケーションの大事さ、楽しさ、難しさが身をもって感じた。
- 山あり、農地あり、歴史ありのフランスという大国のすごさを感じた反面、それになんとかくらいつこうとしている日本のすごさも感じた。たとえば、TGVと新幹線を比べた場合、不利な条件が多い日本が対抗していることなど。
- ほんとうの幸せ、生きがいについて考えさせられた。